

資料をいただきました

ライター

舟橋 左斗子さんより

以前、「被災した外国人について情報がほしい」という問い合わせに「鷹取協会へ行けばいい」と伝えたところ、その取材を記録した雑誌が届けられた。

『FMわいわい』の元となった『ユーマン(ベトナム語で「親愛」)の開局となった理由や、当時の鷹取教会の様子などが記してある。



靨

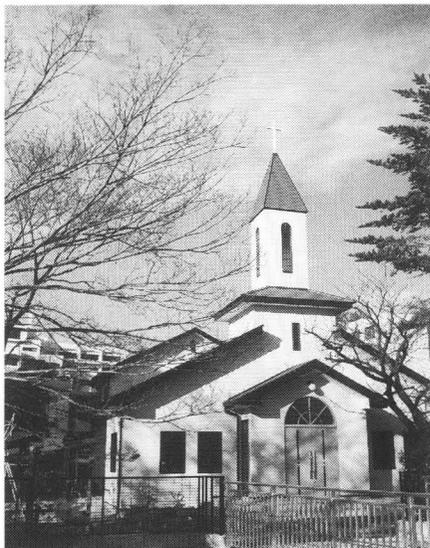
光の子幼稚園

船越 諭さんより

『光の子幼稚園・大震災からの歩み』

震災直後の95年2月5日(再開2日目)からの写真を始めとしたパンフレットや、園長自らの体験を記した手記。

テントを使った保育室や、建設中の教会堂を利用したクリスマスパーティーなど、当時の苦労の中でも元気づけに育っていく園児の姿がうかがえる。



日本総合研究所

神戸社会システム研究部

高橋さんより

当資料室所蔵の避難所日誌を参考にして資料集を作成中との連絡をいただきました。

西田ひかるのサイン

現在、NHKの大河ドラマ『北条時宗』やCMなどで活躍中の西田ひかるさんが、震災当事避難所だった兵庫高校に慰問にいられていました。

西田さんは、被災した子供らと一緒に歌を歌ったりして、避難所の中に『力』と『明るさ』を与えてくれたようです。

その時に書いていただいたサインが資料室に2枚あります。ぜひ、ご覧ください。

シンポジウムのお知らせ

阪神・淡路大震災をどう伝えるか

—メモリアルセンターの問題をどう考える—

主催 歴史資料ネットワーク

後援 震災・街のアーカイブ

日時 2001.7.8(土) 13:30~16:30

場所 ピフレホール会議室A

(新長田駅南スグ)

震災資料室では震災資料の提供を呼びかけています。保存し、公開していきたいと考えています。みなさまのご協力をお願いします。

人・街・ながた
震災資料室だより

人・街・ながた

震災資料室

発行

〒653 神戸市長田区北町3-4-13
電話(078)579-2311

発行人/寿 広文
編集/山西・小寺大漣・武川

第55号

もくじ

- ①紫陽花の似合う街
- ②防災自治研報告
- ③避難所の記録(室内小)
- ④資料をいただきました

紫陽花の似合う街

ともに旺盛な生命力。復興する神戸にふさわしい花だ。

紫陽花(別名:七変化・手毬花)

昭和四五年五月に、神戸市制八〇周年と万博開催を記念して国際港都のシンボルとして、市民アンケートにより『市民の花』に決まる。

紫陽花は、神戸の土壤に適しており、六甲山系に幅広く自生し、親しまれている。

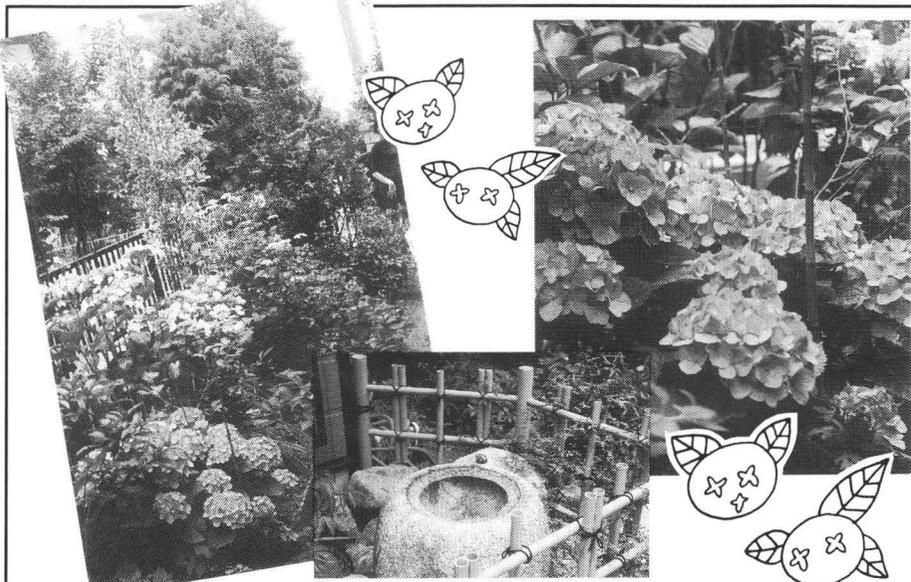
原産国は日本だが、幕末にオランダ医師シーボルトが、愛した女性「お滝さん」を偲んでヨーロッパに持ち帰り改良された。花は解熱薬、葉はオコリの治療薬になる。

花ことは「移り気」「あなたは冷たい」

県立夢野台高校付近、房王寺町で丹精にされたアジサイのあるお宅を訪問した。七段花・墨田の花火・山アジサイ・富士の高嶺などが咲き乱れている。また庭には、震災で引越されたご近所の方から頂いた手水鉢が置いてあり、なかなか風情がある。

このあたりは震災後ほとんどの家が取り壊され、震災前から建っている家は十数軒ほどしかないそうだ。お話を伺った方も平成八年に自宅を再建された。その後、木曾の駒ヶ岳を訪れたとき、折れていた枝をもらって帰り、自宅で挿し木したところ根付いたそうだ。梅雨の季節の風情によく似合っている。

市民の花—紫陽花。優しい姿、美しい花色と



自治体の地域防災と コミュニティ

長田区長 長田 誠一
副区長 長田 誠一

震災は多くの教訓を防災機関・市民に与えた。今春、当区で研究会が開かれ各都市交流がされた。助言者は林春男京都大教授にお願いした。発表は練馬区・静岡県・大阪西区・長田区



高橋 洋 (練馬区) 自治・分権の時代に相応しい市民が主体となる災害対策をめぐり区民・区・防災機関(官・民)の協働によるネットワーク型の災害対応への転換を計ってきた。町会・自治会PTAに「避難拠点運営連絡会」の結成を呼びかけ、更に以前からの「防災会」「市民消防隊」も活性化されてきている。



岩田孝仁 (静岡県) 昭和51年「東海地域でM8クラスの巨大地震が明日起こっても不思議でない」の発表があつて以来、積極的に地震対策を進めてきた。陸域直下を震源とする東海地震は観測網を充実して予知が可能との考えで、53年に「大規模地震対策特別措置法」が制定された。そして「地震予知」内閣総理大臣による警



戒宣言 という新しい枠組みができた。阪神・淡路をふまえて「地震対策三百日アクションプログラム」をまとめ施策の展開を図っている。久本昇志 (大阪・西区) 今回の震災を教訓として、震度7を想定し「大阪地域防災計画」を作り複雑・多様化する災害に強いまちづくりを進めてきた。初期初動体制の確立のため災害緊急本部の設置や職員の参集制度の見直し、また対策本部機能を代替できる防災中核機能の整備の検討に入っている。また、地域の防災リーダー等に防災無線を配付し情報収集・伝達体制を強化した。さらに、各地域の備蓄倉庫を整備して分散備蓄を進めている。南海地震を想定して地域防災力の向上に努めている。



清水誠一 (長田区) 阪神大震災の経験から行政の初期初動に限界があることが明らかになった。また、既存の自主防災組織も殆どが機能せず形骸化した存在だった。その中で主体的に防災活動を行った地区があった。三十年の住民運動の



歴史を持つ真野地区の事例を紹介しながら神戸の「防災福祉コミュニティ」の活動を報告する。

林 春男 (助言者) 自治体の防災はできる事は少ない。だから「コミュニティ・自主防」この十年聞いてきた言葉になる。自主防災組織の結成・育成・活性化・住民啓発等。静岡はミニイノベーション、家を強くしようと耐震診断・補強の話がでた。

震災の教訓は初動と避難所だけなのか。平時の自主防・市民啓発はどうか。予算人員は防災には付きにくい、国土交通省の部局はお金がある、皆さんには智慧がある。防災をクオリティとして全ての事業に課すようなことはできないか。また、市民はお客さまか、行政が導くべき人々なのか。



いくつかの 問題提起

林 春男 (助言者) ○備蓄について私はずっと備蓄はするな。備蓄は災害対応する人のためではない。一日目は腹が減らない、一番減るのは被災地周辺の人かも○今の自主防は有効でない、初期初動は一番簡単な部分。首長の腹の据わりいかんだ○避難所運営、三十万人はかつて例がない、不満があったらうが一生懸命やっただけで自負・迫力の中で合理的に進んだ○むしろ、阪神の本当の苦しみは復興のステージに入ってからだ○学ぶべき教訓は、復興に向けての最適な道筋を選ぶか、法も整備されていない、専門家もいない中で神戸が闘っている○普段やっていることしか災害の時にはできない、普段の町がしっかりしていれば初期初動で機能する○確実なのは南海トラフの地震をどう乗り越えるか(高齢社会の中で起きる)○本場に大切なのは、家を安全にする、人間と人間の繋がりを豊かにする。(文責 清水誠一/震災資料室)

避難所の記録

その日、そして、6ヶ月

(長田区室内小学校)

『KOBET2001』のホームページにある『神戸からの感謝の手紙』のなかから震災体験談として、当区室内小学校の竹中徹教頭(当時)による避難所の記録を紹介する。

長く、誰もが経験したことない日々が始まった。校内は、運動場・校舎に避難された方々がひしめき、まるで野戦病院の様相であった。混乱の中、一つ一つ指示を与えつつも、今思えば



系統だったものでなく、その場その場の対応ばかりであった。それでも職員たちははてきばきと行動をしていった。暗くなつてからも続々と増え続ける避難の人々。厳しい寒さ。せつかく運び込まれても息を引き取る人。やりきれない気持ちも伏せて、遺体を安置所と定めた『なかくよし教室』に運ぶ。5人の方が亡くなった。避難者の中からも炊き出しなど手伝ってくれる人も出てきた。無秩序の中の秩序。何も展望は見えない地震の翌日であったが、立ち上がるうとする人々の行動が生まれてきたのである。

救援物資で最初に運び込まれたのは、おにぎりであった。飢えを満たす、ただそれだけの喜びであった。その後、続々と届けられた救援物資を種別に分類・整理し、保管した。まさに小規模スーパーパーの感であった。

各種のボランティアも忘れられない。最初のボランティアは個人活動で、各地から集まってきた。ある青年は大学合格直後、「今ここで学ぶことのほうが大切。」と大学を1年休学して活動してくれた。震災当初の個人ボランティアは自然と収れんされ、組織だった団体が数多く生まれた。また韓国から三星医療団が常駐して本格的な医療活動を行ってくれた。



薬品・器具が持ち込まれ、医師3名、看護婦4名、通訳2名、その他スタッフ3名という充実したものであった。医療日記を見ると、震災による精神の高ぶりであるうか、高血圧の方が目立った。また各地の教員や役所職員によるボランティアも心強い存在であった。様々な援助やボランティアに対し、竹中さんはただただ感謝している様子であった。